

3 環境情報の収集・発信

センターは、県民に環境意識の向上や環境保全活動を支援するため、ホームページで様々な情報を公開している。ホームページでは、環境学習情報のほか、試験研究情報、国際貢献情報等を提供している。センターでは、ホームページを情報発信の重要なツールの一つとして捉え、より効果的に情報発信を行うための整備を行っている。

ホームページアドレス <http://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/fl6/>

[平成23年度アクセス件数 112,315件 前年度比34.7%増]

また、本年度も新聞による環境情報の発信や、センターの活動を広く知ってもらうためにニュースレターを発行した。

3.1 ホームページのコンテンツ

(1) 新着情報

トップページに、県民向けとしてイベントや各種講座等について案内。

(2) 展示館と各種講座及び研究所からのお知らせ

募集、公開講座参加のお知らせ、展示館休館日、ニュースレター、ココが知りたい埼玉の環境、研究成果情報等掲載。

(3) センターの概要

総長あいさつ、組織概要、沿革、全景図(航空写真)を掲載。

(4) 利用案内

所在地、電話番号、休館日、入場料、交通、研修室の利用、講座情報、研究所公開等について掲載。

(5) 施設紹介

全景図(航空写真)の掲載ほか、展示館、環境情報プラザ、生態園を施設毎に紹介。

(6) 学習・情報

環境大学、県民実験教室、生態園体験教室などの講座情報ほか、出前講座、生態園だよりについて掲載。

(7) 研究所

試験研究の取組、国際貢献について掲載。また、併せて刊行物をPDFにより提供する「刊行物データベース」を掲載。

(8) 研究成果の情報(機関リポジトリ)

(9) 環境関連リンク(センター内)

里川再生クリニック、二酸化炭素濃度速報値、光化学スモッグによるアサガオ被害調査、生物多様性データベース等。

(10) 環境関連リンク(センター外)

光化学スモッグ注意報等発令状況(大気汚染常時監視システム)、埼玉県自然学習センターほか。

3.2 ニュースレターの発行

センターが行っている試験研究の内容や様々な講座、イベントなどの情報を県民の方々に広く情報提供するため、ニュースレター(A4版、4ページ)を、平成23年度は4回発行した。なお、ニュースレターは、センターのホームページからも閲覧及びダウンロードすることができる。

(1) 第11号(平成23年4月発行)

- ・環境科学国際センター新総長ごあいさつ
- ・平成22年度埼玉県環境科学国際センター講演会
- ・ココが知りたい埼玉の環境(2) 埼玉の気温は周辺と比べて上昇していますか?
- ・環境学習 ・イベント情報

(2) 第12号(平成23年7月発行)

- ・研究・事業紹介 「埼玉県の魚「ムサシトミヨ」の保全対策」
「国際貢献事業(中国上海大学との協同研究) 蘇州河の有害化学物質調査」
- ・ココが知りたい埼玉の環境(3) 地面の下ってどうなっているの?
- ・環境学習 ・イベント情報

(3) 第13号(平成23年10月発行)

- ・研究・事業紹介 「微小粒子状物質に関する研究」 「緑のカーテンと環境保全活動の支援」
- ・ココが知りたい埼玉の環境(4) 石綿ってどんなもの?
- ・環境学習 ・イベント情報

(4) 第14号(平成24年1月発行)

- ・研究・事業紹介 「地中熱利用のための地下熱環境調査と評価に関する研究」 「ごみ埋立地からのガスを調べる」
- ・ココが知りたい埼玉の環境(5) なぜ焼却炉からダイオキシンが出てくるの?
- ・環境学習 ・イベント情報

3.3 センター講演会

当センターでは、広く県民に活動内容及び研究成果を紹介することにより、県民のセンターに対する理解と環境問題への関心を深めることを目的として「平成23年度環境科学国際センター講演会」を平成24年1月31日に埼玉会館(さいたま市浦和区)で開催した。当センターの坂本総長による基調講演を行うとともに、センター研究員による研究成果・事例の発表及び研究活動紹介のポスター展示と解説を行い、環境問題への理解を深める機会とした。センター講演会の参加者は171名であった。

(1) 基調講演

生態系サービスと地域環境保全 …………… 埼玉県環境科学国際センター 総長 坂本和彦

私達の地球上での活動は生態系の持続性が維持されてこそ成り立つものです。温暖化対策のために、カーボンニュートラルな性質からバイオマス由来の燃料資源が注目されています。しかし、森林伐採による大規模なプランテーションによる燃料資源植物の栽培などは、これらがもたらす正の部分と生態系に与える負の部分とをきちんと評価する必要があります。生態系の維持・保全と両立する環境保全対策が取られていくことが重要です。カエデ樹液を利用する森林生態系保全の仕組みのように、地域と整合した持続性の高い環境保全システムの構築により、地域の生態系は機能し続け、私達に様々な生態系サービスを提供してくれるのではないのでしょうか。

(2) センターの研究成果・事例紹介

地域住民と協働での里川再生

— 浄化資材と植栽を組み合わせた簡易里川再生技術の小河川における適用試験 — …… 水環境担当 木持謙

埼玉県の重要施策の一つに“みどりと川の再生”がありますが、その中で、“人との関わりを通して、水や生き物の豊かさが育まれる川”を「里川」として、人と自然が一体となった里川の再生に取り組んでいます。水質改善はいうまでもなく、生き物あつての里川なのです。本発表では、地域住民の参加・協働が可能な、水質浄化資材と植栽を組み合わせた里川再生技術について、小河川を対象に有効性を評価した研究を紹介しました。

地球温暖化が農業生産に及ぼす影響

— 温暖化で農業はどうなる？ — …………… 温暖化対策担当 増富祐司

地球温暖化は我々の将来の生活にどのような影響を及ぼすのでしょうか。「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)では、農業、健康、生態系、水資源などの多くの分野で、様々な影響が起こると予想しています。本発表では、これらのうち、農業分野に焦点をあて、アジアと日本の水稻生産、埼玉における果樹生産に関し、地球温暖化が及ぼす影響について最新の研究結果をもとに報告しました。

地域に即した有機性廃棄物の循環システムの設計と資源化推進への取組

— 廃棄物系バイオマスの資源利用を目指して — …………… 資源循環・廃棄物担当 長谷隆仁

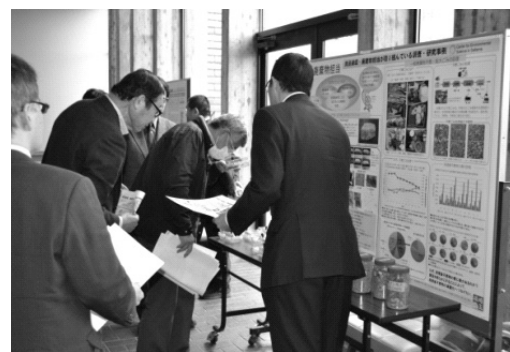
本発表では、埼玉県をフィールドとし、有機性廃棄物を堆肥として最大限活用するために、どのような有機性廃棄物を堆肥化し、その堆肥をどのように流通させることが最適かについて推計した結果を紹介しました。また、堆肥利用の限界を踏まえ、現在、他機関と進めつつある堆肥化以外の資源利用に関する研究について、その概要を報告しました。

(3) センターの活動紹介

各担当がその活動概要を紹介するポスターを展示し、参加者に説明するとともに、質問に答えた。



基調講演



ポスター展示

3.4 環境情報の提供

(1) モニタリングデータの提供 (CO₂)

環境科学国際センターは、さいたま市(1991～2000年度)、堂平山(1992年度～)及び当センター(2000年度～)において、地球温暖化原因物質である大気中のCO₂の濃度を観測してきた。測定に当たっては、世界気象機関標準ガスを基準としており、観測データについては、温室効果ガス世界資料センター(WDCGG)へ提供することにより、国連世界気象観測機構(WMO)の観測網を通して世界各地に供給した。平成21年10月からは、当センターの観測結果(速報値)をセンターホームページに掲載(自動更新)し、公開している。

(2) 環境情報の海外への発信

英語版ホームページを開設し、当センターの取組について海外に向けた情報発信を行った。また、英語版、中文版パンフレットを作成し、ホームページ上で公開している。

3.5 マスコミ報道

センターの試験研究、環境学習等に関して、記者発表を行ったほか、取材を受ける等の結果、以下のとおりマスコミによる報道があった。

(1) 新聞報道、広報誌掲載

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内 容
5月 8日 (日)	埼玉新聞	比企地域の魚紹介 カラー図鑑を発行 東松山県土整備事務所	都幾川などの清流が流れる比企地域の魚がカラー図鑑「比企の川 生き物図鑑」になった。編集は比企の川づくり協議会、発行は県土整備事務所。A5判23ページで29種類の魚と6種類の甲殻類を紹介。魚の特徴が分かりやすく解説され、魚の見分け方も写真入りで掲載。解説は県環境科学国際センター金澤光さんが協力。比企の市町村に配布される。
6月12日 (日)	埼玉新聞	大切にしたい海の恵み 今年も東京湾からアユ遡上 元荒川通り熊谷・忍川へ	埼玉さつての魚博士、県環境科学国際センター自然環境担当部長の金澤光さんは、越谷から熊谷へ至る元荒川に注目する。越谷から上ったアユたちは、北鴻巣で忍川に入り、最後は熊谷の市街地を流れる星川にたどり着くことが、最近わかった。金澤さんが投網を打ったり、丸網ですくたりしてアユを捕らえ、2年がかりの実地調査で突き止めた。
9月27日 (火)	埼玉新聞	県、除染実験を開始 三郷幸房小 効果的な 方法模索	小学校の校庭などの放射線量を低くする方法を調べるため、県は三郷市の市立幸房小学校で「放射線量低減化実証実験」を始めた。測定結果などを公表し、効果的な除染活動の参考にしてもらうのが狙い。この日は、同校の校庭と校庭の隅にある滑り台下の2カ所が対象。測定したのは県環境部環境科学国際センターの職員6人。
9月27日 (火)	朝日新聞	三郷の小学校で除染実験始まる 県、週内にも結果報告	東京電力福島第一原発事故による影響で県東部の大気中の放射線量が比較的高いとして、県は三郷市と連携し、同市茂田井の市立幸房小学校で放射線量低減化実証実験を始めた。校庭の表土を削るなどの手法で調べ、効果的な除染方法を市町村に示す。
9月27日 (火)	毎日新聞	三郷・幸房小で除染実験 線量低減に向け表土削る	県は、福島第一原発事故の影響で高い空間放射線量が測定されている三郷市茂田井の市立幸房小で、線量の低減化に向けた実証実験を始めた。校庭などの表土を削り、どれだけ放射線量が下がるのかを確認するのが狙い。実験結果に基づいて、除染方法を三郷市と協議する。除染を終えた後、ノウハウを県内の各市町村に伝える。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内 容
10月 4日 (火)	埼玉新聞	放射線量、大幅減 三郷 幸房小の除染実験	県は、三郷市の幸房小学校で実施した放射線量の低減化に向けた実証実験結果についての中間報告を行い、土を1センチ削ると放射線量が半分以下に減少するなど、効果的な除染方法が確認できたと発表した。
10月 4日 (火)	読売新聞	空間放射線量50%減 三郷・幸房小校庭の除染実験	県は放射線の低減化(除染)に向けて、三郷市茂田井の市立幸房小学校で実施した実証実験の中間結果を発表し、校庭の土壌を1センチ削り取ることで空間放射線量を約50%低減させることができたを発表した。
10月 4日 (火)	朝日新聞	三郷の小学校で除染実験 最高毎時3マイクロシーベルト超	三郷市立幸房小学校で県が行った放射線量低減化の実証実験で、県は、体育館の外壁付近の大気中から最高で毎時3.6マイクロシーベルトの放射線量を記録したと発表した。同小は付近を立ち入り禁止にしている。実証実験の結果を受け、県は市と連携し、同小の校庭全体を重機で、遊具下は手作業で、それぞれ深さ1センチ分を除去。さらに効果を調べる。
10月10日 (月)	埼玉新聞	「胴長」着けて魚捕り 騎西小の児童たち 五感で自然体験	騎西小は東日本大震災で避難している福島県双葉町の児童も通う学校で、双葉町出身の児童も5人参加し、きれいな川と汚い川の宿泊体験学習を9、10日の2日間行った。県環境科学国際センター自然環境担当部長の金澤光さんは「小山川と違い、元小山川ではドジョウしかとれないはず。においや魚の味など、川ごとに違う自然の実態を子どもたちが五感で感じ取ってくれば」と2日間の体験に期待を込めた。
11月26日 (土)	埼玉新聞	モダンと懐かしさ共存	センターの紹介として、展示館や情報プラザ、県の環境試験研究施設等からなる建物の部分と昔の県東部地域の原風景を再現した生態園の部分とといった大きく分けて2つのパートから成り立っている。モダンな展示館は様々な工夫を凝らした展示物を体感することにより、身近な環境問題から地球規模の様々な問題をあらためて認識でき、自分自身も地球環境の一部であることを思い知らされる。又、生態園では水田、池沼、原っぱや屋敷林などが再現されそこで見られる動植物の一覧も表示されている。各ゾーンを木道でつなぐ風景を眺めていると子どもの頃走り回った「ふるさと」が見えてくる。林脇の道にはドングリが散らばり池から魚がピシャットとはねる音、原っぱを歩くと枯れ草や落葉は足元でクシャットと音をたてる。「子どものころ、家の周りこんな風だったよなあ」ベンチに腰掛けそんな懐かしさにしたる時間が楽しい。最新の環境問題が学べるモダンな建物その隣りにある県東部地域の原風景、ちっとタイムスリップ気分が味わえる1回で2度楽しい施設である。
12月23日 (金)	日本経済新聞	センター新春お楽しみ企画	平成24年1月5日オリジナルしおりづくり、6日コバトンのペーパークラフトづくり、8日アニメーション上映会のイベント実施について、紹介された。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内 容
12月29日 (木)	日本経済新聞	センター県民実験教室	平成24年1月22日県民実験教室「びりりん！静電気のひみつと電気くらげ作り」のイベント実施について、紹介された。
1月 1日 (日)	読売新聞	センター新春お楽しみ企画	平成24年1月5日オリジナルしおりづくり、6日コバトンのペーパークラフトづくり、8日アニメーション上映会のイベント実施について、紹介された。
2月12日 (日)	埼玉新聞	天然アユで地域おこし 19日嵐山 荒川再生でシンポ	荒川流域のアユ遡上調査結果や里川づくりの取り組み状況などを報告する「天然アユを生かした川の再生と地域おこし」をテーマに意見交換する「第16回荒川流域再生シンポジウム」が19日嵐山町の国立女性教育会館で開かれる。NPO法人「荒川流域ネットワーク」が企画し、シンポジウムは、県環境科学国際センター自然環境担当部長の金澤光氏が「2011年度のアユの遡上環境調査と12年度の調査予定」、埼玉南部漁協朝霞支部長の小林一己氏が「新河岸川水系のアユ増殖活動」、県水環境課副課長の針谷さゆり氏が「里川づくり県民運動の取り組み」をそれぞれ報告する。
3月 7日 (水)	埼玉新聞	守れ！ムサシトミヨ 24日、熊谷で講演会	熊谷市ムサシトミヨをまもる会(竹内章会長)は同会の設立25周年とムサシトミヨが市の魚に選定されたことを記念して、講演会を熊谷市立文化センターで24日に開く。講演会では、県環境科学国際センター自然環境担当部長の金澤光さんが「いま、ムサシトミヨを守るために必要なこと」をテーマに基調講演。
3月21日 (水)	埼玉新聞	市街地の川でアユ産卵 朝霞・黒目川 動画撮影に成功	東京都東久留米市に源流があり、新座、朝霞両市の市街地を流れる黒目川でアユの産卵と受精の瞬間の動画撮影に地元で自然保護活動に取り組む青年が成功した。黒目川では2007年10月、県環境科学国際センター自然環境担当部長、金澤光さん(58)が生まれたばかりの仔魚(しぎょ)を捕獲し、天然アユの産卵も確認しているが、産卵の様相を動画撮影したのは初めて。 07年、ふ化した直後の仔魚を金澤さんが捕獲した新聞記事を見た。産卵の現場を撮影したいと思った。金澤さんは「東京湾から遡上した天然のアユ稚魚が黒目川で成長して秋に産卵し、生まれたばかりの仔魚が東京湾に流れ下り、翌春に再び東京湾で育った稚アユが遡上している。東京湾と埼玉を結ぶ命のサイクルが成り立っている」と語る。
3月25日 (日)	読売新聞	ムサシトミヨ講演会	熊谷市ムサシトミヨをまもる会(竹内章会長)は24日、市立文化センター文化会館で設立25周年の記念講演会を開いた。講演は、ムサシトミヨが昨年4月に市の魚に選定されたことも記念して開かれ、会員ら約230名が参加。県環境科学国際センターの金澤光・自然環境担当部長が「いま、ムサシトミヨをまもるために必要なこと」と題して基調講演を行い、繁殖活動を行っている市内の小中学校での取り組みも紹介された。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内 容
3月27日 (火)	埼玉新聞	ムサシトミヨ 僕らも守る 「まもる会」記念講演で子どもらが紹介	熊谷市ムサシトミヨをまもる会は24日、設立25周年と熊谷市の魚選定を記念した講演会を熊谷市立文化センターで開いた。この日は25年間の活動報告や県環境科学国際センター自然担当部長の金澤光さんが基調講演。久下小学校、佐谷田小学校、熊谷東中学校の児童・生徒たちが取り組みを発表した。

(2)テレビ放映、ラジオ放送

放送日	局名	番組名(タイトル)	内 容
7月14日(火)	FM NACK5	「モーニングスクウェア」	8月27日から開催される「彩の国環境大学」の受講生募集のお知らせ。